

特集 2012年度早稲田大学芸術学校 講演会 「社会芸術としての建築 -物こそ人なれ-」

2012年12月01日(土) 15:00-17:00

講演：高崎 正治 (建築家 / 王立英国建築家協会名誉フェロー / 京都造形芸術大学教授)
司会：赤坂 喜顕 (建築家 / 早稲田大学芸術学校校長)
場所：早稲田大学小野梓記念講堂

記録報告：山口 英城

赤坂：2012年度早稲田大学芸術学校講演会を只今より開催したいと思います。本日はお忙しい中、土曜日のお休みの中、多数ご来場頂きましてありがとうございました。芸術学校では、2005年から毎年、世界で活躍する建築家の講演会を開催してまいりました。第一回は安藤忠雄さん、その後、槇文彦先生や池原義郎先生など著名な建築家にご講演頂いてきたのですが、今回は、高崎正治先生をお招きしました。

まず、高崎正治先生をご紹介したいと思います。私ぐらの世代ですと大変有名な方ですが、皆さんのお手元に略歴がございますのでご覧ください。高崎先生は1953年に鹿児島県、指宿のお生まれです。1977年大学在学中に、新建築の国際設計競技で一等を取られ、鮮烈なデビューを果たされました。若い方は、あまりご存知ないかと思いますが、今では年間100ぐらいのコンペ行われているのに対して、当時日本で行なわれていたコンペは、3つくらいしかありませんでした。その中で一番の登竜門と言われたコンペが新建築の住宅コンペでした。75年くらいからですかね、磯崎さんが審査員になった頃に、国際コンペになって、当時AAスクールの学生だったトム・ヘネガンやハンス・ホライン、それからアーキグラムのオーレン・チョークなどが入選して、それまでのローカルなコンペの格が一気に上がり、我々は学生の頃大変興奮いたしました。次の年、76年はリチャード・マイヤーが審査員で、一等がピーター・スミッソン、ピーター・アイゼンマンやアーキグラムなどが入選。なかなか日本人が一等に入らないと皆が言っていた時に、1977年のピーター・クックが審査員の時に、高崎先生が一等を取られたんです。和紙に筆で描いた「コンフュージョン」という非常に衝撃的な作品でした。当時、私は20代でしたが、高崎正治という存在をそこで初めて知りました。その後、高崎先生は単身ヨーロッパに渡られ、ピーター・クックやギンター・ドメニクのところで修行され、1982年に日本に帰国、TAKASAKI 物人研究所を設立して90年に設計事務所を開かれました。99年から、教育の方にも力を入れるということで、京都造形芸術大学の教授に就任され、教育に携わりながら作品も作ってこられました。2001年に日本人としては数少ない、王立英国建築家協会、RIBAのフェ

ロー建築家に選ばれています。1987年に「結晶のいろ」という、当時新建築の表紙を飾った作品を発表されました。これは大変な話題になった作品で、残念ながら取り壊しになって今は残っていないのですが、取り壊しになる時にも篠山紀信が撮影をして、社会的に注目されました。大変素晴らしい作品で、今見ても非常に斬新なデザインです。

それから、最近では被災地の支援活動にも参加しておられ、その活動も後で見せて頂けると思いますし、その個人的な建築を作る為には大変な技術的な苦勞もされています。日本よりも海外の雑誌によく掲載され、30年に渡って活躍しておられる建築家です。

芸術学校は学校の教育方針として「共に作る」、「個性を伸ばす」、「領域を超えて」という3つのマニフェストを掲げています。特に「個性を伸ばす」ということに関して、力を入れていきたいと考えております。昨今、日本の建築の同人誌化しているジャーナリズムを見ておると、同じような人が出て、どこをみても四角い白いキューブが散乱しているようなデザインばかりで、等質化、均質化、無国籍、それから無人称、無個性といった状況が進んで、個性的であることが難しくなっている時代です。我々の世代は個性的じゃないと生きていけない時代でしたが、その中でも個性の塊のような人が高崎先生です。

それでは、よろしくお願ひします。



司会の赤坂喜顕氏



講演中の高崎正治氏



図1



図2



図3

高崎：皆さん、こんにちは高崎です。今日は約60枚のスライドを通して、私の建築の考え方を述べたいと思います。

初期の作品

最初の建築作品は14歳の時です。アメリカの建築家チャールズ・ムーアにその作品を送りました。彼とは後日、1978年にドイツで「君はあの時の坊主頭の中学生の君か！」と感動的に再会します。

私の生まれ育った場所は小学生の頃、結構自殺が多かったのです。その原因の多くは「生きる」というテーマにぶつかってしまうことです。私はその「生きる」というテーマをずっと突き詰めて、最後に「瞑想」という言葉に行き着きました。人は「瞑想」によって人になるのです。人になる空間はどういうものであるか、追求した作品から私の建築人生が始まりました。

その時の記念に自分の志を曲げないために、建築のプランを作ろうと思い、ドローイングしました。当時からよく、和紙と墨で図面描いています [図1]。東洋は書で始まり書で終わるとというのが私の考え方です。今ではCADなど便利な物がありますが、東洋人が筆を手放したら、もう東洋人ではなくなってしまうというのが、私の信念です。これは木造三階建ての住宅です。建築は四角や家型が主流で、今でも状況は変わりませんが、生きた人間を扱うには、生きた感性や感情と向き合わないと、建築は人間の意識に応えることはできません。そういう生命的思考で、丸い球体と楕円形に生命の木が伸び、血管のようになって、建築のフォルムを支えて息づかせています。模型にするとうろこう形になります [図2]。私の作品はモデルを作って完成まで、すごく時間がかかります。この作品も19歳の時のものですが、未だに構想を温めていて、現実になるまでずっと追求しています。これを作りたいという人がいたら、即、現物になるわけです。

これは中学校2年14歳の時の「瞑想真」というテーマの作品です [図3]。この入口から入っていきますと、約四畳半のスペースがあって、東西南北に開口部があります。環境音楽に当時非常に興味がありまして、パイプ

が三つ出ていて、そこに風を取り込んで音と光によって人を瞑想に誘うという考えで作った作品です。

これは19歳のときの作品です [図4]。学校で勉強していると、どうしても建築らしくしてしまいます。建築には技術があります。技術を学べば学ぶ程、技術音痴になりやすいのです。普通の人は建築のイメージを多様性を持って、「これが建築」という答えはないのです。私が最も関心があり、世界も注目しているものに、「禅の庭」があります。白い砂の上に石を置き、それを石庭、枯山水と称します。基本は奇数で七五三です。これは縄文の思想を受け継いでいます。そのような手法で建築が出来ないかと考え、地下一階、地上二階の住宅を作りました。友達と初めてコンクリートで作った記念碑的な作品です。真ん中にスリットがあり、光が内部に落ちていく。非常に固い石の中に一種のエロチシズムや女性的なフォルムを持ち込んだ住宅にしました。手前には、京都の石庭と同じように白い砂を敷いて石を置いて、外から見た感じは巨大な岩が転がっている、でもそこが住まいだというコンセプトです。

学生時代、建築学会主催の全国卒業設計展に出品した作品が「マニフェスト・ブランク」で、その次の作品が、先ほど赤坂先生から紹介頂きました「マニフェスト・コンフュージョン-混線」 [図5] です。「混線」というのは、線が混じることで、多様な価値観を融合することです。多様な価値観を融合して、もう一つの新しい秩序を創っていくという意味です。右の方にエオンタとありますが、これはギリシャ語で存在という意味です。「建築」とは「建てて築く」と書きます。最近「建物」と呼ぶ人が多くなりましたが、私は「建築」と呼ぶことに拘っています。「建築」とは「建てる」ということ、「实在」させるということです。「築く」とは、「存在」させることです。「存在」とはどちらかという目に見えないものを扱い、「实在」とは目に見えるものを扱う。だから「建築」には「实在」と「存在」という二つの意味が含まれ、この二つのものが常に混ざっています。ここでは、「实在」というよりは、「存在」がテーマです。

建築の設計には約束事が多く、常に人間の業や欲望と向



図4

き合っています。彫刻や絵と違って、建築には必ずクライアント=他者がいます。クライアントは自分で財を成して、建築家に仕事を依頼しますが、我々は「業」とどのように向き合うかが重要です。それが建築家の人生を狂わせたり、深い悩みに陥れたり、様々な作用を起こします。私は「業」との向き合い方をいつも意識します。ここでは、建築の約束事を全部取っ払って、点・線・面で柱や階段や外壁などを作ろうと意識しました [図6]。図面は和紙に描かれています。和紙と墨、あるいは鉛筆です。和紙に描いておきますと、約二千年保ちます。私が死んだ後も、私の建築の流れを引き継いで欲しいと思っておりまして、残す図面は全て和紙に描きます。

それから学生時代に、大学紛争や大きな返還運動があり、沖縄が日本に返還されました。その時、私は新しい時代に合った新しい芸術運動を行いたい、あるいは総合芸術の原則に基づいて建築を見直してみたいと思い、大学の時に友達とグループを結成し、物人研究所を立ち上げました。その頃は、沢山のプランを作って展覧会や海外の雑誌に発表する活動をしていました。大学卒業後、ドイツに渡り、シュツットガルトに事務所を設立、新建築のコンペでグランプリをとって、ヨーロッパに根付くということになりました。

ヨーロッパの人と話しておりますと、必ず禅のことを聞かれます。「禅って何？」に始まり、「なぜご飯を箸で食べるの？」や「白とは何なの？」と様々なことを聞かれます。こちらも当時は不勉強で、そのように聞かれても解らないのです。なぜ、白い砂を敷くのか、なぜ黒じゃないのか。そういうことを深く研究していくと、むしろ日本が向こうに影響を受けたのだということが解りました。ひとつは古代縄文の流れを汲んでいる古代神道の流れ、それからインドの仏教文明、それから儒教・道教の中国文明、それから明治以降のアンブロ・サクソンの西ヨーロッパの文化、そして戦後のアメリカ文明。私は、この五大文明が融合した日本で誕生し、それ故このような哲学を持っているのだ、と話します。

また、ヨーロッパの建築家は日本の建築家と違って、非常に感情的で、欲望が強い人が多いのです。例えば「明

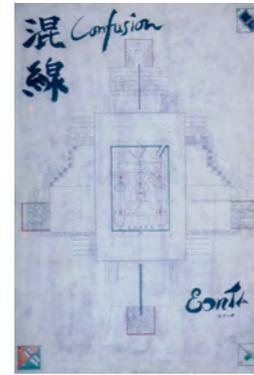


図5

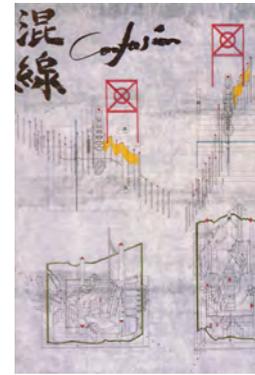


図6

日の朝までに5案作れ!」と言うのです。5案ということは、だいたい平・立・断面を描きますので、夜の11時から朝までに、25~6枚の図面を描かないといけない訳です。その上、1案から5案までパターン化するのが嫌いで、全部個性的でないと満足しないのです。そのような場所で長い間、仕事をして、いろんな建築の衝撃的な作り方をがむしゃらに学びました。ギュンター・ドメニクという私の師がいます。今年亡くなったのですが、オーストリアでは国民的な建築家です。彼は感情をストレートに出す激しい人でした。ドローイングも、のたのた描かないで、瞬時に2~3分でぱっと書き上げるタイプの人。日本人の僕が描くと、ふわっとしてしまうのですが、ヨーロッパの建築家は、ものすごく鋭角的で攻撃的な図面を描きます。東洋人と西洋人の違いを学びながら、異文化と格闘していました。ある日、赤を塗るにしても、その赤の意味が全然違います。宗教的背景が違うと色彩の意味が全く変わります。その時に「海のシルクロード建築構想」を打ち立てました。東の日本から西のヨーロッパまでヨーロッパ文明、ペルシャ文明、中国、インド、日本の文化を融合する都市の構想です。

その後、たまたまウィーンからモスクワの大学に行く予定でした。モスクワから日本は、とても近くに感じました。ああ、久しぶりに日本に帰ろう、ということ帰った時に住宅の仕事の話があり、原宿に事務所を開きました。





図7



図8



図9

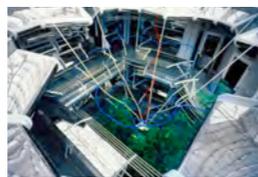


図10



図11

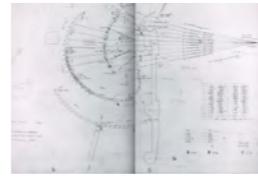


図12



図13

CRYSTAL LIGHT (1987年)

これが事務所を開いて最初の作品です [図7]。この実施案は確か3案か5案目です。最初、クライアントに見せる時にも模型と図面を持っていくのですが、図面を見せても上下も解らない、模型の方が速くて解りやすいのです。始めは模型見せると、「これなんですか?」、「えー!なんでこれが建築なのか?」という感じでした。当時は渋谷区役所に確認申請を提出したのですが、役所側の要請で申請と同時に、「何故この建築を作らないといけないのか」、「何故これは建築なのか」という内容の分厚い論文を提出しました。確認と関係ないとは思いますが、当時は若かったのも、正倉院から現代建築の日本の歴史上に、この建築が、どう位置づけられるのか、という事をがむしゃらに書きました。それで、やっと申請の許可が下りました。

それから、当時、恵比寿にあった工務店が請負予定だったのですが、着工の三ヶ月程前に倒産してしまい、大阪が本社の施工会社になりました。結論から言いますと、施工会社が施工をしたのは、天井の仕上げだけで、あとは私たちで型枠大工を探し、土方を探し、ステンレスの職人を探し、全部そうやって職人を探しました。ステンレスの金属工事業者は、川口にある当時20代の社長と10代のスタッフ僅か3人ほどの工場でした。この量は凄いです。このステンレスを徹底的に磨いて、鏡面に仕上げました。その鏡面仕上げの為に、全国から不良少年を集め、約半年かけて磨かせました。だからステンレスの輝きがひとつひとつ違います [図8]。

都市に建つ建築は、環境芸術や時間芸術という意識で作っています。普通の人は建築にあまり関心がありません。ですから、そんな人に「何だろう?」と気付かせることです。例えば、中庭の空の上にルーバーリングと名付けたものが浮いています [図9]。普段、あまり空を見ない皆さんが、こういう物を付けると、つい見上げてしまう。見上げると、この建築装置の向こうに、あ、雲も動いている、空も青いと気づいていきます。そこで、初めて自然と人間が建築を通して出会う訳です。

建築の役割の一つにクライアントの要求する機能を満たすということがありますが、それ以上に、建築を通し

て大自然と向き合ったり、あるいは自分と向き合ったりすることがとても大切であると思い、環境との関わり方を常に意識しています。

これは中庭の見下ろしです [図10]。三次曲面を描いて、ふわふわふわと浮いています。これは、上の先程のルーバーリングの外形を抜き取った形で作られています。これは三層になって宙に浮いています。風が吹くと微妙に動き、モビールになって、自然環境に対して敏感に反応します。

これは、中庭から入った内側の階段です [図11]。いつも建築を作る時に、自分の中に問いかけをします。階段ってなんだろう、踏面ってなんだろう、蹴上げてなんだろう、手すりってなんだろう、階段を上るって、どういうことだろう。通常階段の裏側は、あまり意識しない場所ですが、ここでは階段の段裏をデザインすることによって、階段の持つ意味を表そうとしました。

その図面がこれ [図12] で、先ほどの階段は、この部分です。外周はガラスブロックになっています。皆さんはCADで図面を書いていると思いますが、私は、この曲線を書く為にどんな式がいいか、まず式を作ってから数値を出していきます。その数値は、小数点第6位まで出します。建築では、そこまで出す必要はないのですが、ただ、その小数点第6位まで出すという執念や緻密さが職人を刺激し、この建築の持っているエッセンスを引き出すのです。

これが先ほど、階段を支える鉄の赤いパイプと青いパイプの曲率を出しているところです [図13]。バツしているものがありますが、これは意匠的には何アールで作りたいと思って、実際作るのは職人さんですから、「いや、このアールでは作れない。」や「機械が無いから出来ない。」などと言われます。それに柔軟に対処して、曲率を変えていきます。自分の理想を実現しようとする時、常に現実があり、その現実に対応しながら作業していきます。

これは中庭の回廊です [図14]。これが下段の収納スペース、それから側面の窓、中段の収納スペース、これが窓、これも窓、これが上段の収納スペース。東京で家を作る場合は土地をいかに有効に使うかということを考えます。



図14

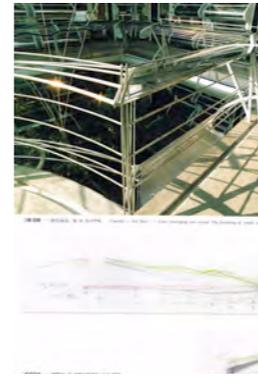


図15



図16



図17

土地を有効に使うためには、人が活動する場所と収納スペースが重要です。収納がうまくないと、いくら大きなスペースを作っても、物で溢れた空間になります。日本には押し入れがありますが、その発想に近いと思います。このように外壁を収納スペースとして、収納と採光を取る外壁を作りました。青年達にひたすら半年磨かせ、ぴかぴかに鏡面になったステンレスに、自然の風景や、四季とか時間が映ります。夕方になると、ステンレスが真っ赤に染まります。これを見て、時間が動いている、地球が動いている、我々の周りが息づいているということがわかります。また、このような線材は、風の音が響いて、時間によっては、光の雫を拾います。そのような、自然を感じる装置として建築と自然が一体になるような作品を目指しています。

最初は、鉛筆でドローイングします [図15]。これは、この手すりのラインで、手すりを上げて、下げて、上げて、など。ここが第一の手摺、ここが第二の手摺、図面でも微妙に変化させてきます。変化をスケッチして、そのあと定規を作ります。亚克力や木製の板で定規を作ります。雲形定規みたいなものです。自分たちで作った定規で図面を描いていくという作業を長い間行ってきました。なるべく機械でできた線ではなく自分の感性で、あるいは気持ちで線を引くっていうのをベースにしていますので、フリーハンドに近くなります。簡単に言うと、抽象絵画だと思っていいです。その抽象絵画が平面になるし、立体になると空間デザインになるし、ヴォリュームになると彫刻になるわけです。だから建築の中に絵画の要素があり、彫刻の要素があり、立体の要素がある。それを総合してまとめるのが建築、というのが私の考えです。このような絵画的なプランをいつも研究しています。建築は人間と同じ、いつかは無くなるのですが、図面は紙の状態でも永く残ります。ですから、図面の構成に自分のその時々思っていた思想とか哲学を込めて残していくように心がけています。

これは手摺の上部です [図16]。手摺で自然の動きと建築の動きの調子をとっているところです。これは手摺で、これは庇の部分です。ヨーロッパの建築と日本の建築の大

きな違いは、雨の量です。乾燥地帯と多雨地域では、屋根や庇の作り方が全く違います。特に日本の建築の特徴は、屋根と庇にあると思います。その庇の部分に特化して、もっと動きを与え、建築全体に動きを与えています。

これはドアです [図17]。このドアには窓がたくさんあります。ここにひとつ三角形の窓があって、ここから風を入れて、ここから抜きます。ここも開きます。

日本には、昔から引き戸や障子、襖、板戸などがありますが、横に引くのが原則です。ヨーロッパのドアはガチッと開いて閉める。ドアは閉めると、内部と外部を完全に遮断して、内と外を明確に仕切るのが特徴です。また、日本の襖や障子は、軽くて音も無く、ずっと閉まるのを良しとしますが、ヨーロッパのドアは重量があります。ドアを閉める時は、ぐっと引いてドアを閉めるという意識があります。ここでは日本とヨーロッパの間を狙って、日本のドアを作るにはどうしたらいいかということテーマにしました。日本の障子のように、閉めても気配を感じる、音が漏れる、閉めた時でも内と外がつながり、あるいは柔軟に開くことができるようなドアを考えたのです。また普段、白やグレーの無表情なドアを見ますが、ドアそのものをオブジェに、立体作品にしようと思い、色彩を使っています。このドアの構造は、くの字型に曲がっています。日本人は人を招く時に「いらっしゃいませ」と頭を下げますが、このドア自体も傾いで人を招き入れます。展覧会等で何度も試作して、何とか実現につなげました。

日本建築の特徴は、屋根と庇と、もう一つは、柱です。柱は日本では神に例えるくらい、依代として柱を愛でます。皆さんが、よく耳にするのは、床柱や大黒柱、あるいは神社の棟持柱や天地柱や心御柱などでしょうか。柱というのは創世神話の中にも出てきます。柱の特徴は、立てるとということです。石庭も立てます。立てると垂直のラインが生まれます。垂直のラインは、天と地をつなぐものです。「天と地をつなぐ」という意識で柱を立てていきます。「天と地をつなぐ」ということは、天と地が常に上下に交流するという事で、柱に背割りを入れて、背割りの右と左で上下に運動している、という意識で造形



図 18



図 19



図 20



図 21



図 22

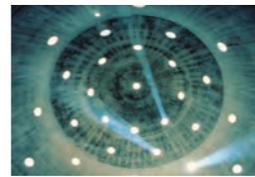


図 23



図 24

しました [図 18]。一本の檜の大木から手斧で削りだし、四本彫って頂きました。

これは天井です [図 19]。ヨーロッパで、天井というのは、天球を感じる、天空を感じさせるものですから、イスラムでもキリストでもこういう丸いドーム状のものが多く見られます。それは空に向かって神の意識を与えます。日本では、もともと家自体を森羅万象の象徴として扱っているのです、天井は魑魅魍魎の宿る場所です。現代では天井は固いものになってしまい、天井そのものにあまり意味がなくなってしまいました。頭上に柔らかくて動くものがないかと思い、和紙で照明を兼ねた、柔らかい天井の作り方を試みました。照明が点きますと、熱でこれが柔らかくふわふわふわふわと微妙に動きます。

それから、学生の時に物人研究所を作った時に、社会芸術の物づくり、人づくりをテーマにしました。「言霊」という言葉がありますが、物づくりとは、「物霊」に人の気持ちを込めるといふ、物を素材や材料として見るのではなく、物に人間の気持ちを込めて、徹底して人間化する、という考えです。

また、人づくりの一貫として、子供造形教室を 1985 年頃から行っています [図 20]。最初は軽井沢で初め、現在は鹿児島島の桜島でも行っています。その造形教室から、建築や舞台美術を志す人が何人も出ています。この運動を広げて、鹿児島と宮崎で「からもじや運動」という活動を 20 年近く行っています。これは国内外の学生、27 カ国の学生を鹿児島や宮崎に呼び、ホームステイさせ、農業体験などを通して、日本の風土や新しい農業技術を普及させる活動です。また、1995 年からアフリカで木を植える人を育てる為に、セネガルで、環境教育学習という名の下、バオバブの木を植えたり、泥で家を作る活動もしています。

ゼロのいえ (1991 年)

これは 90 年代の初めに作った「ゼロ・コスモロジー」という住まいです [図 21]。現在は私の九州事務所のアトリエになっています。先程の「結晶のいる」の仕事を契機に、久しぶりに故郷に帰り、周辺の市町村を見て回り

ました。そして、多くの農村地帯が過疎化と少子・高齢化が進み、貧困に喘いでいる現状を見て、地域の建築に向き合いたいと思い、ここを拠点にして動き始めました。

この建築には煩惱の数 108 の半分、54 の窓があります [図 22]。窓は採光や換気のためのものですが、私の考えは、太陽のエネルギーを感じ、そのエネルギーを建築の中に導く為に設けます。潜水艦で使われている窓を使いました。内部は高さ約 1.2m の楕円形の空間が水の上に浮いています。

仏教でいう「空」や「無」という哲学を表しています。文字通り、ゼロの空間をビオトープの水の上に浮かせ、生きている時はリビングルーム、亡くなったらお墓になるという想定です。これはゼロの空間の下にある、直径約 6m の円形階段の池です [図 23]。下にいつも水音があるので、水琴窟のような効果もあります。このような曲面の型枠は、当時は事例が無くて大変でした。体育館や空き地や駐車場を借りて原寸図を描き、型枠の制作に入りました。このゼロの空間の躯体は、ゼロのフォルムを感じるように、通常の打ち継ぎ目地を設けませんでした。フォルムを完成するために休憩無しに日夜完成するまで、ずっとコンクリートを打ち続けました。

輝北天球館 (1995 年)

これは 90 年代に発表した鹿児島市の都市計画です [図 24]。鹿児島市の地図で、先ほどの事務所はここにあります。ここに、巡礼の道ができるように、将来 100 年 200 年、あるいは 300 年の都市計画のマスタープランを市町村や県に、長い間提案しています。いくつか実現しましたが、焦らずに次の時代に引継いでもらいたいと思っています。

最初に古代遺跡の場所を探しました。鹿児島は霧島という天孫降臨の地があり、聖地や伝説の場所が幾つもあります。その遺跡の調査を行いました。そして、その場所に、道祖神のように建築を置いていく構想です。

その中の一つとして実現した建築が、輝北天球館です [図 25]。これは輝北町という、人口が 5 千 5 百人ほどの小さな町があり、過疎に喘いでいますが、星が日本一綺麗に見える地域です。町では、その地域のシンボルにな



図 26



図 27

るようなコミュニティ施設を作りたいという要望でした。唯一の機能として展望施設があり、屋根が開いて、星空を観測できます。今頃のシーズンは、星の好きな人たちが集まり、観測を行っていると思います。地上 5 階建くらいの高さです。

私たちは、土地を見つめることから始めました。霧島の方角に歩いていたら、たまたま豊玉姫という神が降りた遺構があって、石が埋め込まれていました。町の人はそれに全然気づかず、これは海の様様だということに教え、その霧島の方角に全て建築を位置づけるように計画しました。この軸が、ちょうどぴたりと霧島の方角、天孫降臨の地、高千穂に向いており、さらに、この軸が琉球の首里城に向かって延びています。従って、この建築は、南九州の古代遺跡の軸上に位置しているわけです。この先が尖っている方角を辿っていくと、遺跡があるのです。眺めのいい場所があるので、対岸からもこの建築が見えます。これは避雷針です。避雷針が波打っています。この柱はかなり太いんですが、ここから見たら小さく見えます。

これは現場の風景です [図 26]。農村地帯ですから木造の平屋かせいぜい二階建てしかない所です。あとは、畑と牛がいるくらいで、本当にのどかな良い場所なのですが、そこでコンクリートを打つのは、とても大変でした。まず、皆がコンクリートを見たことがないのです。公共工事の場合は、施工業者を選ぶのに入札を行います。たまたま落札した業者さんが鹿児島のゼロコスモスの施工者だったので助かりました。

まず建築の図面の見方がわからない町の人たちに、図面の見方を教えます。「これどうやって見るの?」「何アールってどういう意味なの?」「どうして丸くするの、四角じゃだめなの?」あるいは、「台風来たらどうなるの?」や、ちょうど神戸震災後だったので「地震が来たら、どうすんだ?」。それから、確認申請を鹿児島県に出したら、全く判断できない、全く理解できない、ということで東京の構造審査会で審査を受けました。現場に入っても、四角い建物ではないのでポイントが取りにくい。空中にポイントがあると、今のように便利な道具が無いし、田舎で



図 28



図 29



図 30



図 31

ずから下げ振りでもやるしかありません。そういう施工の難しさを克服しながら、彼らを月に何回か美術館に連れて行って、ピカソの絵を見せたり、面白い彫刻を見せたり、あるいは食事会をして交流もしました。何故こんな難しいことをやらなければいけないのか、それには、どういうミッションがあるのかなど、型枠の意味や機能についても説きます。コンクリートは通常上から落としますが、ここではヨーロッパでの経験を踏まえ、組積造を作るように、コンクリートを下から順番に打って行きました。

これは型枠施工中の写真です [図 27]。型枠も工場で作ったり現場で作ったりします。ここに楕円形のくぼみがありますが、こういうのは現場で作ります。彼らはあまり計算が得意ではなかったの、私たちが出していました。曲面体の型枠で難しいのは、型枠を留めるための金物です。まっすぐの場合は、内側と外側の型枠は同じポイントに穴を開ければ良いのですが、曲面だと曲率が変わるので、穴の位置をきちんと計算しないと外れます。型枠を組んだりコンクリートを打つ時は、専門の職人だけではなく電気屋や他の職人にも参加してもらいます。

これは夕景です [図 28]。ちょうど向こうに山並みが見えます。こういう山並みや段々畑の形など地域の形が、そのまま、この建築のプランになったような作り方をしています。また、数字や数字の組み合わせにも、凄くこだわります。数字の魔術があるのではないかと考えています。日本の数字はヨーロッパと違って、七五三や 3、5、7、9 など、奇数がベースです。これは縄文以来の日本人の伝統です。

ここに階段がありますが [図 29]、これを作るのに、約半年かかりました。簡単に作ってしまう思い出に残りません。特に地方で建築を作る場合は、簡単に作らないということが大切なことです。難しく作る、ちょっと汗をかかせることで、「ああ、あの時は苦労した」とか、「あの時はこうだった」など、それが思い出になり、伝説になり、神話になるんです。ですから、簡単に作れない方法を取ります。この階段は、踏面、蹴上げ、一段ずつ違います。極端に違うのではなく微妙に変えました。一段目が 1.8cm とすると、二段目が 18.5cm、踏面が 3.0



図 30



図 32

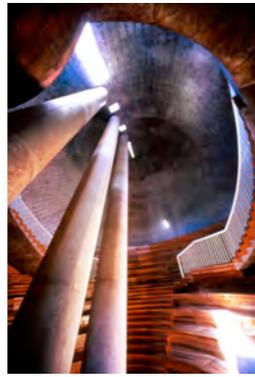


図 31



図 33



図 34



図 35

cm だと、こっちは 3 2 cm あるとか。段を微妙に変えると、ダンスするように、次第に人間の体の運動のリズムと絡んでいきます。微妙に変化を与えて、身体を動かすように、あえて階段を難しくしました。この右階段と左階段の踏面が違います。手摺の角度も微妙に変えていきます。同じ角度で作ると職人もこちらもすぐく楽ですが、こうやって微妙に変えることによって、階段の手摺と言えども手摺が人と会話する。手摺という言葉ではなくて、言葉を会話にしていこうとか、手摺にコミュニケーションさせ、手摺が使う人に働きかける。不意に妙なポイントで作ってあげると、足がつかずいたりします。あれ、なんだろう、この階段、という感じです。人間に不意を打たせると、そこに偶然、不思議な感覚が人間の中で起きるわけです。

これ[図 30]は一階部分で、中央が水を象徴した庭になっています。ここは広場で土間になっています。この辺りには、昔から夕日を眺める習慣があって、このように親子連れで海を眺めているわけです。向こうに錦江湾が見えます。外周に、山形柱と呼んでいる柱が、目形をした平面プランの外周に立っています。それは、これが山の建築であるということ象徴する為です。建築の中に、何かを象徴させ、何かを暗示させることを期待しています。

これは内部空間です [図 31]。このゼロの空間全体は、高千穂の方角に傾いています。そこに約 3 3m の柱が大地から突き抜けています。この柱は、岩石を削りだしたようなコンクリートにしたかったので、打ち継ぎを無くす為に三日三晩連続で打ちました。まっすぐだったら、まだ楽ですが、斜めになっている柱を綺麗に打つのは、すごく難しいです。打放しは、後で補修できないので、すごくテンション上げて、一週間寝ないぞ、というくらいの覚悟がないと絶対打てません。そういうのを三本打ちました。3 というのは社会共同体を象徴しています。1 は独立してシンボリック、2 は対話する、3 で初めて社会が成立する。その象徴的な三本の柱は、真ん中を突き抜けて避雷針になっています。そこに、こういう稲妻スリットを入れました。山の上なので稲妻がよく発生します。象徴的に稲妻形の自然光を入れています。外周は、月並みですが地元の木を使って円形劇場のような階段にし

ました。ここに人が座り、対峙したり、イベントしたり、いろいろな使われ方をします。大勢集まってワイワイやるコミュニティと独り自分を見つめるコミュニティ、その集団と個を味わえるような空間にしたいと思いました。

これは中二階からの見下ろしです [図 32]。ここはエントランスで、外のコンクリートが中に突き出ています。外のエネルギーが中に突き出てくる。床に目の形をした窓があり、そこから、一階の広場を見ることができます。左の階段と右の階段は、こちらが中心に向かって、そしてこちらが中心から外れるように角度を変えると、同じ階段でも違った印象を与えます。空間が渦巻いて感じられるように、木目を選別しながら板張りしました。

EARTH ARCHITECTURE (1994 年)

次の作品は、70 人規模のコミュニティを想定した集合住宅です [図 33]。今月号の芸術新潮に、そっくりコピーされた彫刻作品が出ていて、驚きました。建築が大地になり、公園になるというコンセプトです。建築そのものが一つの畑であり、山であつたらいいと思います。このような部屋があって、そこに様々な光が入り [図 34]、回廊があり、植栽のスペースがあります。これは夜景です [図 35]。屋根が階段広場になっています。

照明保育園 (1995 年)

これは木造の保育園です [図 36]。お茶畑から見た外観です。保育園としての機能はありますが、週末は高齢者や地域の人が集まって来ます。だから保育園というのを核にした、地域のコミュニティを作る為の施設だと思いました。お施主さんが、向かいにあるお寺で、夜や週末は大人達がいろいろな会議をしたり、飲み会をしたり、多目的に使われています。

これが玄関ホールです [図 37]。階段があって、これが野外の教室です。そこに傾いた柱が立っています。元々あった木を残しました。

南溟のいる (1996 年)

木が集まると森になります。コンクリートの場合は岩



図 36



図 38



図 37

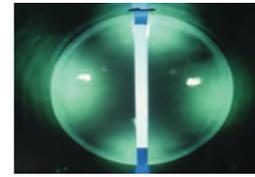


図 39



図 40



図 41



図 42

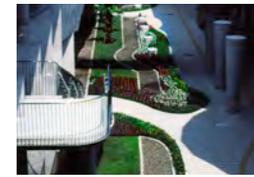


図 43

になり、山になる。ですから木造で作るときには、森を作るイメージで建築を作ります。

これは、個人の住まいとミュージアムです [図 38]。これは外観で、これが内部空間。これが彫刻を展示する空間です。外周に階段がありますが農家の方や子供達など多くの方がこの階段に座って休憩しています。外壁のコンクリートを磨き、塗装を何回も塗り込んで、漆仕上げみたいに黒光りした鏡面にしました。そして、そこに風景を映し込んでいます。周りの民家の黒々としたボリュームと調和させるためにこのような仕上げを試みました。シルバーの濃淡で三色使っています。

これは一階で上を見上げたところ [図 39]。南北に入ったスリットから自然光が入ります。絵画的な空間にしたかったので、色を使いました。色彩と時間がテーマです。

なのはな館 (1998 年)

高齢者が増えて、高齢者とどう向き合うかが、大きなテーマとなっていますが、これは、90 年代の初めに作った建築で、高齢者中央大学です [図 40]。交流がテーマの施設で、野球場が四つ半くらい入る規模の大きな建築です。現在では一般にも解放されていますが、温泉を使って体操したり、健康増進をするための指導者を育成する温泉施設もあります。これは施工に 5 年くらいかかりました。構想から約 10 年間お付き合いしました。このように、大きなプロジェクトになると、いろいろな意見が出て、議会説明が大変でした。

また、日本のハートビル法第一号の建築でもありました。ハートビル法は 280 項目くらいのチェックポイントがあり、それを満たしています。建築の場合は常に基準がありますが、いかにもその基準で付ける手すりなどは悔しいですね。だからそれを感じさせないように、デザインはそれを超えていかないといいません。

この中央ホール [図 41] では、マラソン大会のセレモニーや音楽会、あるいは産業祭りなど、いろんなイベントが開かれます。ここでのテーマは太陽と月です。

建築に限らず庭と彫刻も結構つくっています。焼き物も自分で作りたくるし、掛け軸や花も生けたくなりま

す。小さな器から、都市全体まで、ついつい構想が広がってしまいます。ここでは庭を作りました [図 42]。庭木は植木屋に頼まないで、自分で探します。山や畑に行ってお話するのです。ここでは、ガジュマルの木やアコウの木とキンモクセイを入れました。中央に花壇を作り、四季折々の花を植えています。

天地のいえ (2009 年)

これは三年程前に完成させた木造住宅です [図 43]。これは木造の骨組みです。木を扱うと、神木で建築を作りたいという欲望が出てきます。材木屋に頼んで買うのではなく、自分で山に行き自分と波長が合う木を探してみる、これを神木といいます。これは奈良の神木で作った建築です。それから、今ではプレカットと金物で作るのが主流ですが、伝統工法にこだわって作りました。木造二階建て、施主は子供が三人の家族です。規模は、それ程大きくありません。一辺が約 11m で、中に立つと 45~6 坪ですが三階分の高さがあります。エアコンは一切入れていません。床下で冷やした空気を入れて上で抜く、いわゆるエコハウスです。この白い壁材は鹿児島島の火山灰でできた漆喰です。外周は池を作りました。池で緩衝地帯を作り、道路の輻射熱や人の侵入を塞ぎます。

これはそのドローイングです [図 44]。実施図面を描く前に、鉛筆でドローイングします。光の入り方は、どうだろうかとか、風はどうやって抜けるだろうかとか、床の質感など。ドローイングすることによって、自分がこの建築の物語の中に入っていきまじ、根気も強くなります。建築は短距離ではなく、マラソンやトライアスロンに似ています。根気強くないと、なかなか夢を実現するのは難しい。特に、見たこともない物を作るには、根気強さが必要です。ドローイングしながら、根気強さを学ぶのです。その後、実施図面に起こしていきます。これが一階平面図で、これが二階平面図、これが断面です。建築の平面図は施主のニーズに合わせますが、建築の断面は、むしろ建築家の領域です。そして、ドローイングは、建築図面というより作品です。図面も、生活に困ったらオークションで売ります。そうすると、設計しているより、



図 43

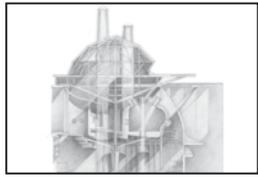


図 44



図 45



図 46

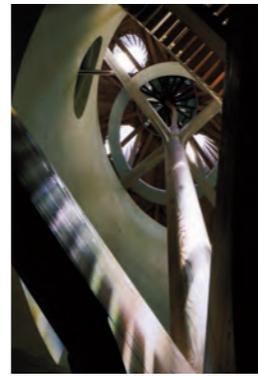


図 47

ドローイング描いた方が儲かるのかなって最近思うのですが(笑)、今朝も、スウェーデン人が私のドローイングを手に入れたので、サインしてくれないか、とメールが入りました。最近では知恵がついて、一つの作品としてドローイングをします。そして生活が困ったときに、これを手放すわけです。だから現場の実施図面も一枚が一つの作品として意識して描きます。そういう意識でいうと、敷地も一つのキャンパスです。このキャンパスに、どんな絵を描くかっていうのが、建築の平面の面白さです。建築の計画とは、「企てを図ること」なのです。だから建築の図面を描く時も、そういう意識で書くと、新しい何かが生まれるのかもしれない。

これは夜景です[図 45]。階段があって、ここに溝があって、ここに柱があって、一つ一つは繰り返しません。いろいろなシーンがあって、いろんな要素がカオスに満ちていて、人間が体験するまで全体が読めません。ぱっと見て解る、というのは、面白くありません。ひと目見ても解らないような、体験して初めて、その仕組みが理解できるような構成を心がけています。

これは、二階に上る階段です [図 46]。これは子供室で、ここから見下ろすと、誰か上がってくるのか解るし、このガラスから光を採り入れています。日本建築の面白さは、ずれているということです。その一番いい例が、違い棚です。微妙にずれる。わざとずらすのが数寄屋建築の特徴ですが、時代がどんどんシステムティックになって、学歴が高くなると、みんな理性的、知性的、分析的になります。そこで、ちょっとずらしてあげると、ふいに別な世界が見えてきます。わざとずらしてカオスをつくるのです。間違っただけなのではなくて、わざとずらしていくと、そこに一種のゆらぎが体験できます。写真では白くなっていますが、木目が見えるように染色仕上げになっています。白い部分は、火山灰の漆喰です。火山灰は無料の材料ですから、そういう物を使うと町にお金をもたらします。

これは中央の吹き抜けにある柱です [図 47]。上部に四つの窓があり、採光と換気を取っています。このように曲面にしたり、削りだしていきます。螺旋、ひねりを加

えた曲面体が微妙に変化します。それを体験すると、視覚で解ったり、あるいは体で解ったり、足の裏で感じます。床が、すべて平らというのは、安心感があります。ところが山に行くと、平らな所が無くて、全てがでこぼこしています。そうすると、足の裏が非常に知的になります。微妙に床にうねりを加えていくと、床と足に関係が発生します。

こころシェルター (2011年)

これは、2011年から福島被災地で行っている「こころシェルター」という活動で、今もまだ続いています [図 49]。私は23キロ地点の南相馬というところに行き、警戒区域から約5分のところにずっと住み込みながら、このような住まいを作ってきました。外部の人間は、私だけで、ボランティアもメディアも誰も来ません。今もそうですが、内部被爆の恐れがあるので、人が近寄りません。とてもこの世とは思えない風景が沢山あり、言葉に表せない地獄でした。私は、RIBAの名誉フェローの団体で行っている、世界の紛争地や困っている人を助ける運動のために、ロンドンの展覧会に参加していたのですが、日本がこのような事態になり、急遽、私の意識の中で日本をなんとかしたいと思いました。会社の事業を1年半くらいストップして、ささやかな自分の貯金を全部注ぎ込んで、このような住まいや集会場を作ってきました。一畳から十畳まであります。

現地では、多くの人が床に寝ていて、三日も寝ていたら床ずれもひどいし、暑いし、寒い。被爆するので、怖くて窓は開けられない。毎日、がたがたと余震もあります。そういう、地獄みたいところで、ずっと住み込みながら、「人間が生きる上で最も必要なものは何だろう」、あるいは、「日本人にとって、最も安らぐものは何か」と考え続け、そして、究極は「道」の思想ではないかと思いました。昔、侍と商人の中間を動く人を「阿弥」と呼びました。観阿弥や世阿弥の「阿弥」です。「阿弥」は、茶道、華道、武道、いろいろな「道」を作り、それは俳句、短歌に始まり、建築でも、茶室、生け花、掛け軸という世界に達します。

最初は、行政をお願いしてもなかなか許可が出ない、



図 48



図 49



図 50

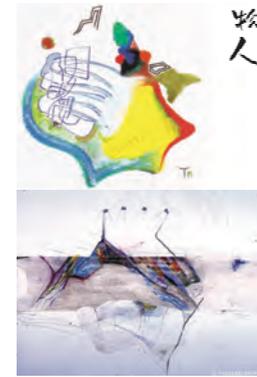


図 51

政治家も全く動かない。世界第二、三位の国で人が段ボールに寝ているのは恥ずかしいことだ、せめて畳の上に寝かせてくれと説得を続け、やっと畳を入れることが出来ました。日本人は靴を脱いで安らぐ民族です。靴を脱ぐ為に、畳は生活の基本だと思います。これは集会所です [図 49]。ペットボトルに花を生け、あるいは自分の好みの写真を掛けます。

それから、消防団の人が250名ぐらい亡くなりました。岩手県の消防団の人たちは、自分の家も無く、路上で生活していて、車で寝ている人は、まだ良いほうでした。人助けをしている人を誰も救わないことに義憤を感じ、岩手に消防団の家を作りました [図 50]。今年の6月に完成し、その後、庭と公園の整備をしています。9月号の新建築に掲載されました。ここでも、「阿弥」の切り開いた「道」を現代にどう生かせるかを考え、中央に鏡板を張り、ここに座って、ご飯を食べるといった空間を作りました。

これは、これから、やりたいという仕事で、心をテーマにしたドローイングです [図 51]。このように、赤があったり、黄色は光の空間で、ブルーは、水の空間です。ここに柔らかいものが入ってくる。いろいろな廃棄物を利用した美術館の構想です。いつも現実を見ながら、夢を描く提案をしています。提案しても、なかなか通じません。時間もかかります。だから根気強く、そういう建築の夢=人間の夢、あるいは無意識の夢、いわゆる芸術文化の夢を提案しながら、生きたいなあ、といつも思っています。それを物と人、物質と人の融合ということで、物人建築という名前をつけました。

以上です。赤坂先生との対話の方が、もっとエキサイティングで面白いことがあるかもしれません、そちらに時間を振りましょう。どうもありがとうございました。

赤坂：高崎先生どうもありがとうございました。いろいろな示唆に富んだ言葉もあり、今まで、私が謎のように感じていた部分も、今日お話をお聞きして解決しました。大変貴重な時間を過ごすことができました。

最初に少しお話ししましたが、私と高崎先生は同世代です。学生時代は政治闘争があった時代で、個性を持ってい

なければ生きていけないような時代でした。「個性とは何か」、ということが一番重要なテーマでした。今日、拝見して、とても勉強になったのは、どうして、あのような激しい形が説得力をもって建っていくのか、ということです。皆さんも不思議に思われたと思います。考えておられる事や言っておられる事が、とても正統的なのです。常識的な話といってもいい。また、日本の伝統的な考え方、あるいは奇数の文化や禅の庭など、ほとんど今の建築家は語りませんが、あえて、真摯にそれを語られます。高崎先生のお話を聞いて、建てたくなる気持ち、よく解ります。当たり前のことを、全然当たり前でない造形で行うところが、凄いと感ずる。 「コンフュージョン」の時から、「結晶のいろ」、それから最近作まで、本当にぶれないで、ひとつの個性を持って、変わらない建築家の筆頭ではないかと思ひます。

いくつかお聞きしたいと思ひます。ひとつは、最初のスタートから現在まで、何か変わったことはござひますか。それから、高崎先生を見いだした建築家ピーター・クックと師であり、共同設計者のグンター・ドメニク。高崎先生が影響を受けつつ、同時に影響を与えていると思ひますが、この二人の建築家を通して、学ばれ、得られたことをお聞かせください。

高崎：最初の質問にお答へすると、自分の気持ちは少しも変わっておりませんが、絶望が多いのです。生きていくと絶望したくなる。だから、希望を持ってやっています。それから、2番目の質問ですが、二人の先生から得たものは、沢山あります。ピーター・クックは、自分の教え子が卒業して、どんどんスターになっていく、例えばザハナンカもそうですが、相当、焦りやジレンマがあったのだと思ひますが、ヨーロッパの建築家の凄さというのは、スピード感です。スピード速いし、図面を追いかける、獲物を追いかけるように…。彼らは感情の出し方も上手です。日本人は、すぐ図法として製図したり、技術で考えたりしますが、その技術の前に、エモーションや衝動は無いのか、パッションは無いのか、とよく言われます。日本人は、なかなか感情を表に出さないし、出す訓練をしていないので、困惑してしまひます。そういうところ

が全然違うのではないかと思います。

赤坂：先ほど、楽屋で面白い話をお聞きしました。高崎先生は、海外での講演は、喧嘩腰でやるから、すごく楽で、逆に日本での講演会は気を使うので、大変やりにくいということでした。本当に30年間、海外で、アウェイで戦ってきた方なのです。

すごく複雑で難解な理論で、出来た建築が全然当たり前前、という状況が、今、この国では起きていて、私は憤りを感じています。高崎先生はその真逆で、至極当たり前で常識的なことを全然異常な形に表現されるどころ。そこが、今日一番勉強になりました。私は最終的に建築は形だと思っています。形に建築家の個性が、その時代を生きた全てが残っていくということです。今日のテーマの「社会芸術としての建築」ということを日本で最初に言い出した建築家は村野藤吾です。それ以降、日本で社会芸術と言った人は高崎先生ぐらいです。もう30年前から言っておられます。それから、形を作っていくためには技術がどうしても必要です。「結晶のいろ」の卵形が日本で最初に登場した時は、私は施工会社にいたのですが、どのように施工したのか、ずっと疑問でしたが、今日お聞きして、やっと理解しました。

高崎：通常、型枠は黄色い合板のパネルで作っていきませんが、ここでは、柔らかい木綿豆腐を作るような要領で作りました。型枠を使わずに、コンクリートを下から入れて、圧力でじわじわと、こういう曲面体を作っていく工法です。といってもコンクリートは勢いで溢れてきますので、それを薄いメッシュを外周に張って、布で押さえながら、じわじわ打っていきます。非常にローテクです。型枠なしで、コンクリートを作った最初の事例です。

赤坂：積んでいるので、組積造ですね。

高崎：はい。日本は軸組だから、立体的に飛んで構成していきますが、とにかく、こつこつと積み上げるのが、ヨーロッパ人の思考です。ザハの作品もそうですが、ヨーロッパ人は必ず組積造の匂いがします。私は、ずっと長い間ヨーロッパにいましたし、組積造を作るみたいに、岩を作るみたいに、コンクリートを積んで、作りました。

赤坂：私、30年前、帰国された時に、初台のアパートを訪ねたら、一番最後に見せて頂いたドローイングと同じ感じのものをずっと描いておられました。それで、やっぱり人間は一人一人の命がある、というような本当に正統的な話をされていました。全然変わっておられないですね。もっと時間があれば、ピーター・クックの作品やギンター・ドメニクのこともお聞きしたかった。ギンター・ドメニクは、ウィーンでビヒラーとホラインと三奇人といわれていた人で、デコンストラクティビズムの最初の建築家です。

高崎：ドメニクの愛弟子がコープ・ヒンメルブラウです。

赤坂：あの頃は、ギンター・ドメニクが結構ぐにゃぐにゃした作品が多くて…。高崎先生がコンクリートでガッチと作られたら、彼も同じようにコンクリートで作っ

て、ウィーンのあれは高崎先生の影響かなと思います。

高崎：岩が空中に浮いている、あれですね。

赤坂：ヨーロッパは本当に個性を持った人が生きていける成熟した社会だし、アーキテクトの地位が確立していると思います。そういった意味では、日本を離れたことが、高崎先生にとって、30年間変わらずに自分の個性を守り続けられたことに寄与しているのだと思います。違うことをやるのが怖くてできない、今の日本の風潮に私は憤りを感じているのですが、如何でしょうか。

高崎：日本はいろいろな文明が融合、ちゃんぶるして、日本人はすごくいろんな事を知っているし、勤勉です。表現者としては、世界でも最も能力が高いと思うのですが、なかなか優秀な人材が出てこないというのは残念です。学校で理想を教えているのに、卒業した途端、つまらないものつくってしまう。涙が出ますね。なんとかしようと思っても私にも思いましたが、理想と現実の距離があまりにも開きすぎています。でも本当は、理想と現実とは表裏一体、紙一重なので、そういう理想をチャレンジできる社会に早くなって欲しいと思います。

赤坂：私は普段、あまりメモ取らないのですが、今日、久しぶりに良い言葉があったので、幾つかメモを取りました。「設計とは企てること」というのはいいですね。それから「不意を打つ」。不意を打って登場するのは、「コンフュージョン」や「結晶のいろ」を含めて、高崎さんがいつも不意を打って登場してくる。「不意を打つ」というのは、見たこと無いものを提示するというでしか起き得ないから、つまり予定調和ではない世界を切り開いていくということで、まさに建築の一つの使命です。不意を打って出て行く、それから、その為に汗を流す、尋常じゃない苦勞をして作っておられる。それから、今日はあまり話されていませんが、構造設計に関しては、ご自分で計算されたり、最後は田中彌壽雄先生ですか。

高崎：そうです、基本的には田中先生にほとんどお願いしています。感心するのは、鉄筋を組んだ時に田中先生の設計の良さが解るのです。パウル・クレーのような線の美しさ、鉄筋の美しさが際立ち、配列が非常に綺麗でコンクリートを打つのがもったいないくらいです。

赤坂：空中に浮いた手摺も、すごく綺麗でした。やっぱり「結晶のいろ」ですね。実は、この作品が新建築の87年11月号に出た時に、「水中に漂うシンボル」という評論を伊東豊雄さんが寄稿されています。伊東さんが、多分中野の家の後くらいだったと思うのですが、このあたりから伊東さんの建築が軽くなってくる、こういう浮遊感っぽくなるのは、高崎さんが彼に刺激を与えて、日本の建築シーンに、釘を打ってきたのかなという気がします。東北の被災地での活動を通して、久しぶりに日本での活動も再開されたということで、これからのご活躍もすごく楽しみです。そろそろ時間になってきましたが、最後に若い世代に向けてメッセージをお願いします。

高崎：はい。私はヨーロッパに友人の建築家が沢山おり

ますが、建築はオリンピックだと思います。オリンピックの目標は金メダルですが、そのために自分の生活や肉体を維持していきます。最近では、友人のザハがグランプリ取って東京に建てますが、彼女、今ではプロレスラーみたいに、こんなになってますが(笑)、若い頃はこんな細くてかわいかった。イスラムの人ですし、長い間すごく苦勞して、差別の中でずっと生きていたんですね。髪が黒いだけで差別を受けるんです。でも才能があると認められる。そういう意味では、建築は実物が勝負ですので、自分の学んだ知識と技術を全て現実にしないと建築になりません。現実にする為には、どういう平面描いたら良いのか、どういう断面か、どういう矩計か、どういうディテールか、というのを、一生懸命考えて、学んだもの全てを建築の実現のために、エネルギー投入して欲しいなと思います。もう一つは、昔はアジア=ジャパンでしたが、この3年で、日本の建築家のポジションが少なくなって、他所の国に取られています。そろそろ本気にならないと、建築の流れがアジアの中で別の国に移るのではないかと、危機を感じています。流行にとらわれることなく、あるいは流行から離れて、あるいは超越して、自分そのものを出して、社会とぶつかっていくのがいいと思います。その社会の批判を受けるといのが建築の面白さです。学んだものを全てぶつけて欲しいなと思います。

赤坂：個性を守っていくのにどうすればいいのでしょうか。そして個性を持ち続ける方法とは。

高崎：そうですね。やっぱり信念が無いとだめですね。信念が無いと、やっぱり萎んでしまいます。

私は西行や芭蕉の生き方が好きです。ちょっと世間から外れたり、世間とこう距離を持つというか。距離をとることを日本では間といいますね。あるいは武道では間合いと言います。この間を取って、あんまりどっぷり世俗に浸からないことが、生きる技術かなと思います。間

合いを大事にして、ちょっと傷ついたと思った時は、ずっと引けばいいじゃないですか。そういう間合いを勉強していくと、自分を殺さずに社会の中で生きていけるのではないかと思います。

赤坂：ありがとうございます。ちょうど時間になりましたので、今日の講演会を終わりたいと思います。高崎先生に盛大な拍手をお願いしたいと思います。

講演会「社会芸術としての建築—物こそ人なれ—」を終えて

今年の芸術学校の建築講演会は、王立英国建築家協会名誉フェローで京都造形芸術大学教授の高崎正治先生をお招きし、「社会芸術としての建築—物こそ人なれ—」と題した講演と対談が、2012年12月1日、本校校長である赤坂喜顕教授の司会進行により、早稲田大学小野梓記念講堂で開催された。当日は学内外から約200名の方々が来場し、会場はほぼ満席の状態となった。

講演では、高崎先生が14歳で建築を志し、人間であることや作品であることに傾注された学生時代から、国際コンペでのグランプリ受賞を契機に渡欧され、異文化と格闘しながら現在の建築的思考の基盤を築かれ、独立後、最新の被災地支援プロジェクトまでの代表的な作品を解説。時流に流されず一貫して、社会芸術としての理念の具現化へ腐心された姿勢と飾らない言葉が胸を打つ。

赤坂教授との対話を通して繰り返される「個性」発現の重要性。智識化し、形式化し、無個性化しつつある日本の現状への警鐘である。私達の多くが、頭を情報で満たしているものの、心を虚しく見失っていないだろうか。

明晰な良識に裏打された強く優美な造形形態、随所に散りばめられた洞察力に富んだ人生訓のような言葉。人間が人間らしく、日本人が日本人らしく、この困難な時代を決然と生きていくために必要な勇氣と精神を心に蓄えた1日であった。

